

介護福祉士養成に伴う、教育現場と介護現場の役割と連携 (2)

－介護実習指導者に視点を置いて－

荒	木	隆	俊	専攻科福祉専攻	
伊	藤	和	雄	専攻科福祉専攻	非常勤講師
松	田	水	月	専攻科福祉専攻	
宮	地	康	子	専攻科福祉専攻	

(2014年9月29日受理)

〔要 約〕

介護における専門職の質と量の確保が求められている中で、介護福祉士養成校の立場から、学内での学びはもちろんのこと、学んだ事柄について体験を通して実証していく作業である介護実習は、これまでに以上に充実した実習とすべきであると考えている。そのために、筆者らは介護実習指導者へ大きな期待を求めている。

このような状況を踏まえ、本稿は、筆者らの先行研究も用いて介護実習指導者に焦点をあて、介護福祉士養成に伴う介護実習指導者の役割と養成校との連携並びに介護実習指導者に求められるものについて述べたものである。

I. はじめに

筆者らは、介護福祉士養成校（以下、養成校）として、本学のような一年課程の養成校において、介護実習の位置づけは大きいものと認識している。

このことは、養成カリキュラムの内容からしても同様な解釈ができる。2年課程の養成カリキュラムでは、介護実習に450時間が割りあてられており、全カリキュラムの時間数は1,800時間のうち、介護実習の占める割合は4分の1、本学のような1年課程においては、1,155時間のうち210時間が介護実習に割りあてられ、全カリキュラムの5分の1を占める。

つまり、介護福祉士養成カリキュラム上の介護実習は、介護福祉士の役割について理解し、これまでに講義・実習等の他の科目で学習した知識や技術を統合して、具体的な介護サービス提供の基本となる実践力を習得するためのものとして位置づけられ、養成カリキュラムにおいて非常に重要視されているからと筆者らは解釈している。そして、その介護実習の実習指導に携わる介護実習指導者（以下、指導者）は、将来の介護福祉士になる人材を養成するという大切な役割を担っている。

実習中は養成校の教員（以下、教員）が巡回指導を行うが、実際の介護実習場面の指導の大部分は指導者が行うことになる。その意味でも指導者は、教員と連携して介護福祉士養成教育を行う教育スタッフの一員であるという意識が大切であろう。そのため施設の職

員でありながら養成校の教育にも参画していることを認識し教育的な視点を持ってもらうよう期待しており、質の高い介護福祉士の育成のためには、養成校と介護現場の指導者の連携は最も重要な点ととらえている。

また、実習施設が「実習施設・事業等（Ⅰ）」「実習施設・事業等（Ⅱ）」の基準、その他の要項の改定がなされた「介護福祉士養成課程における教育内容の見直し」¹⁾には、「実習指導者」が制度上位置づけされたことにより、その役割が重要になっており、新カリキュラムの移行に伴い、実習生を受け入れる介護施設も養成校で行われている教育内容を理解しその内容に沿った指導が求められ、介護実習Ⅱを指導する指導者に「介護実習指導者講習会」修了が義務付けられた。

前述の通り、養成校において介護実習は重要であり不可欠である。介護福祉士資格を目指す学生は、学校で学んだ知識や基本的な技術を用いて介護現場で実践を積み重ねることにより、エビデンスに基づく生活支援を習得する。

しかも、介護実習は学生にとって自己成長の機会であり、自身の理想とする介護観を構築する場でもある。実習評価の着眼点をどこに置くかという問題の一つに、筆者らの先行研究^{3) - 6)}でも明らかになったが、介護技術の習得度や社会的適応やマナーの行動といった点も確かに重要な部分であるが、学生の評価対象としてここに着目しすぎる職員が目につく。このようなことから、指導者には、介護福祉士養成教育の具体的内

容と養成校の教育目標等の理解は不可欠であろう。

さらに、介護福祉士の業務は、いうまでもなく社会福祉を基盤としているために多くの社会福祉制度のサービスを提供している。多くの社会福祉制度と関わりをもっているため、以下の3点も同時に認識すべきであろう。

① 介護福祉士の業務とその位置関係

社会福祉制度の動向によって介護福祉士の業務や位置づけは変わってくるということ。言い換えれば、介護福祉士としてさまざまな社会福祉制度の動向を学び、よりよい介護に結び付けていかなければならない。

② 自立生活支援の視点

介護福祉士の業務規定が、心身の状況に応じた介護に改められたことから、介護福祉士に求められることの一つには、たとえ心身に障害があってもその人らしい生活を可能な限り尊重して自立できるよう支援していくことにある。日常生活の中で自立を促すことができるよう、何をどのように支援していけばいいのかを見極め、支援の根拠を明らかにしながら、不足しているサービスを補い、生活を支えるという観点で自立的な生活ができるよう配慮し続けることが求められている。

③ 資格取得で位置付けられている管理職としての視点

サービスの質の向上を考えるのであれば、管理・運営を含めた諸制度や諸政策の熟知はもちろんのこと、その動向も見据えた運営・管理の必要も求められている。

以上の点は、養成校はもちろんのこと、指導者自らが認識し指導にあたらなければならないと考えている。

Ⅱ. 介護実習指導者の役割

実習の受け入れという観点から指導者としての役割を考えてみると、各施設・事業所等において直接的な「実習生の指導」だけではなく、施設と養成校間の連絡調整というコーディネーター役に加え、自施設の職員教育や採用時職員教育等の目的にも繋がっていくものと考えられる。言い換えれば、各施設・事業所の一人ひとりの指導者の役割は個々の実習生への対応だけでなく、各施設・事業所等のサービス提供の確保・経営にむけた職員の質の担保、さらには我が国における高齢者・障害者への介護力の確保に繋がるという大切な社会的役割を担っていると自覚しなければならないということでもあり、指導者の質も問われるようになっていともいえる。

これまでは指導者に対しての特段の教育・研修制度等はなく、任意に研修が実施されてきた経緯があるが、このたびのカリキュラム改正により、全国統一的に研修が実施されることとなったことに加え、「指導者自身」がさらに自主的に学び続けることによって「指導者としての評価」、及び「実習施設評価」の向上にも繋がることになるはずである。

さらに、指導者に求められている資質（自己教育力）という観点からすれば、正しくものを見る力、知識を蓄える力、推理判断・危険予知等に関する力、自分を意欲づける力、経験を通して学ぶ力、組織の期待する役割に応える力等を備えて業務を遂行できる能力を身につけなければならない、介護福祉士養成教育には、この総合的な能力をいかに向上させるかも課題となろう。

また、指導者は「介護福祉士」としての基礎学力、ならびに資格取得後に加わった新たな制度改正の内容や、対象者に関する個々に応じた援助方法の個別性の理解等、日々学ぶ姿勢が問われている。それは「自己教育力」といわれているもので、「周りとのかかわりのなかで自己と対話し、自己を客観的に見つめ、自己の現状を知り、長期にわたって自分で自分を教育していける力」である。これまでのような経験だけを主体とする指導方法を実践することは、学生の「見る力（観察力）」「考える力」「創造する力」の育成を阻害する状況を生み出している場合もある。

つまり、実習指導は貴重な「経験」に加え、「自己教育力」をあわせもって指導にあたることで、学生は養成校で学んだ介護の基本及び原理・原則が現場でどのように応用され活用されているかを知り、新たな疑問や課題を生みだせる力を養っていけるものであると考えている。この「経験」と「自己教育力」の重要性を指導者も意識して伝達しなければ学生への指導のみならず、現場で直接実習指導を担当する介護職員も含めて有効な実習指導へと繋がらないものになっていくだろう。

実習施設・事業等に係る基準の見直し¹⁾については、介護実習は介護福祉士の養成課程において重要な要素であり、「実習施設・事業等（Ⅰ）」と「実習施設・事業等（Ⅱ）」での「実習目標」としている内容は指導者には伝わりにくいと思われるが、その内容には以下の違いがあるということも意識して欲しい。

- ①利用者の生活の場である多様な介護現場において、利用者の理解を中心として、これに合わせて利用者・家族との関わりを通じたコミュニケーションの実践、多職種協働の実践、介護技術の確認等を行うことに重点を置いた「実習施設・事業等（Ⅰ）」

- ②一つの施設・事業等において一定期間以上継続して実習を行う中で、利用者ごとの介護計画の作成、実施後の評価やこれを踏まえた計画の修正といった一連の介護過程のすべてを継続的に実践することに重点を置いた「実習施設・事業等 (Ⅱ)」

この2つに区分して、それぞれの趣旨に即した基準が設定されている。この点を理解した上で、指導者は自施設の職員を対象にした施設内における「実習指導」の研修の実施が望ましいと考える。「実習施設・事業等 (Ⅰ)」においての指導者は項目に応じた指導を行い、「実習施設・事業等 (Ⅱ)」に繋げる役割があり、「実習施設・事業等 (Ⅱ)」の指導者は「実習施設・事業等 (Ⅰ)」の基礎を理解した上で指導しなければならない。この点においても指導者の「自己教育力」が必要とされていくのである。

つまり指導者は、自施設において独自の方法で行われていた介護実習が、養成校と双方連携の上、「介護実習指導者講習会」の内容を十分理解し、機能的、効果的に学生に作用させることで「人材育成」がなされていくシステムを理解しなければならない。

そのために一定の実習指導体制やレベルを担保するためには、養成校との連携はもちろんのこと、他施設の指導者との連携も求められている。

それは、施設ではさまざまな職種で構成されており、各々が有する教育レベルも異なっていることが多い。それらの職員に対して、介護福祉士養成における介護実習の意義・目的、及び、指導方法について施設内研修等を通じて伝達しておくことが不可欠と考えているからである。特に前述した「実習施設・事業等 (Ⅰ)」及び「実習施設・事業等 (Ⅱ)」区分の「意義・目的」について施設職員等への十分な説明が求められているといえる。

さらに、直接学生と関わる機会の多い職員等に対する留意点としては、学生の正当な評価が行えない場合や自施設の新人職員教育指導等と同一視する場面もあることから、実習施設の特性に合わせた研修内容の工夫も必要であろう。

Ⅲ. 考察

筆者らの先行研究³⁾⁻⁶⁾でも述べているが、養成課程での1年間は筆者らは現任準備期間としても位置付けている。教育の本質は人間の可能性や個々の可能性はぐくみ引き出すことにありと考えている。

(1) 自己教育力

ケアの本質というべき、介護という関わりの中で、人間として変容・成長し自己実現を図ってほしいという願いをもって教育にあたっている。そ

のねらいを一番可能に近づけられるのが介護実習である。自己教育力を高めるには、専門知識・専門技術の習得はもちろん、それを確実に、しかも安全に提供できる力は、人間関係も重要な要素になりえる。

つまり、社会人としての自意識を持たせて初めて教育目標達成が可能になるものと考え、介護現場に自らの心と身体を委ね経験して学ぶ介護実習は、人間理解の洞察を含む自己理解と他者理解へと結びつく大きな経験となり、生涯学習にもつながる視点も学ぶことになるものと期待している。

現代の若者は、さまざまな場面において自己を肯定的にしかとらえられない傾向が目につく。あえて、介護実習では、自己批判を基盤にして、自己の言動の振り返りを基盤とした「気づき」や「問い直し」を通して、物の見方・考え方を根拠にして、自己覚知へと結びつけ人間的成長をはぐくみたいと考えている。

しかも、実際に対象者と関わりながら学内での学びを具現化していくのが実習であることからすれば、学生が主体的に学ぶ意志、態度、能力(学生自身の教育力)を尊重することは重要であり、また、指示待ち人間にならないよう導いていかなければならない。このことから考えても、教授する立場にある教員はもちろんのこと、直接介護実習で指導する指導者の役割・使命は大きいものである。

(2) 指導者の役割

指導者の役割には、単に必要な知識・技術を習得させるというものだけではなく、自ら学ぶという視点、つまり、考えるポイントを教授して欲しいと考えている。その一環として、本学の実習評価には、学生自ら自己の実習を振り返るための介護実習自己評価(表1)と、施設から提出される介護実習評価(表2)両者の相違に気づかせ、あえて自ら学ぶ姿勢や今後の課題を個々の学生が自ら抽出できることを期待している。

このことは、養成校における体験学習の有意性を学生も理解するとともに、施設双方の共通理解があって進められていかなければならないことはいうまでもない。この点を整理すれば、体験学習の持つ意味は、学生が自ら学ぼうとする姿勢を持つことにより、自己目標を追求し、解決していくとする姿勢を持つことができるようになること、問題や課題を発見し追及していくことを通して問題解決能力を育てることができるようになることである。そして、学内での学びと体験学習を重ね

表1 介護実習自己評価・学生記入

介護実習自己評価 (実習区分) 実習施設

評価は、いずれか該当するところに○印で記入すること
A・80点以上 B・70点以上 C・60点以上 D・60点未満

評価項目	A	B	C	D
身なり、挨拶、言葉づかいが実習生として適切であった				
助言や注意を素直に受け入れ、協調的に行動できた				
時間や規則及び提出物の期限が守れた				
積極的に行動し、責任をもって最後までやりとげた				
実習の意義を理解し、目的を持って臨んだ				
実習日誌は具体的かつ明瞭に記録した				
感情が安定していた				
専門職への自覚と適性がある				
施設の役割を理解できた				
利用者の生活状況を理解できた				
利用者の身体状況を理解できた				
利用者の精神的要求を見いだすことができた				
日常生活上の変化を把握できた				
(チェックリスト参照) 適切な介護技術が提供できた				
実習生所感				
総合評価 A B C D	実習生氏名 印			

表2 介護実習評価・施設記入

介護実習評価 (実習区分) 実習施設

評価は、いずれか該当するところに○印で記入してください。
A・80点以上 B・70点以上 C・60点以上 D・60点未満

評価項目	A	B	C	D
身なり、挨拶、言葉づかいが実習生として適切である				
助言や注意を素直に受け入れ、協調的に行動できる				
時間や規則及び提出物の期限が守れる				
積極的に行動し、責任をもって最後までやりとげる				
実習の意義を理解し、目的を持って臨んでいる				
実習日誌は具体的かつ明瞭に記録している				
感情が安定している				
専門職への自覚と適性が認められる				
施設の役割を理解できる				
利用者の生活状況を理解できる				
利用者の身体状況を理解できる				
利用者の精神的要求を見いだすことができる				
日常生活上の変化を把握できる				
(チェックリスト参照) 適切な介護技術が提供できる				
実習指導者所感				
総合評価 A B C D	実習指導者氏名 印			

ることにより、介護の現実・現状から、実感を伴って客観的に理解することができることになると考えて、学生自らの「気づき」と自らの「振り返り」をいかに発展させていくか、とりわけ、学生自らの「気づき」をもっとも重視した介護福祉士養成に取り組んでいるところである。そういった自分自身への「気づき」と「振り返り」を強めることにより、学生は、頑張った自分、頑張りがなかった自分を実感してこそ、次へのステップに繋げていけるものと信じている。

筆者の一人は、山形県介護福祉士会主催の「介護実習指導者研修会」の講師をしている。担当は、“実習指導者に対する期待”の研修科目であるが、まず冒頭で、今の介護現場の状況（介護職員の人員不足・離職等）からして、若年層や、福祉・介護に興味関心を持っている人に、実習等を通して興味・関心までも壊すことのないようにお願いをしたいことを伝えている。決して、甘やかして育てて欲しいということではないことを前提として

のことである。そのために、この研修が義務付けられているといっても過言ではないのではないかと指導者に伝えている。

その研修の具体的な内容には、①人とうまくかわれる人間を育てたい ②感性を育てたい ③観察力を育てたい ④コミュニケーション能力を育てたい ⑤懂れる介護者に会わせたい等といった内容を盛り込んで講義している。そして、指導の過程において指導者自身も、今の自分があるこれまでを振り返って欲しいこと。つまり、自分自身の施設職員としての歴史・成長・悩み等も振り返りながら、自分自身も見つめ直し、見つめ直した自分自身と学生とを重ねて指導して欲しいとお願いをしている。

それは、今ある自分の成長の姿を伝えて欲しいということであり、欲を言えば、指導者は学生の発言や行為・気づきといったことに対して、良いところを見つけ、引き出し、誉めて欲しいこと。また、間違いや失敗については、責めるのではな

く、なぜ間違いなのか、なぜ悪いのかを考えるポイントを説明して、実習期間内に学生のフォローや、学生の考えたことの確認をしてもらうよう付け加えている。

(3) 介護実習体験と教科学習の統合

学生は、介護実習において教科学習で学んだ知識・技術を介護現場で直接利用者と関わる中で、利用者との相互関係を通して統合していくことになる。介護過程に見られるように、実際に支援を受けながら生活している利用者それぞれの個性を理解することは想像以上に難しいことである。そこでは意識的に人間理解を深めることは必須の条件であろう。故に、介護過程で学んだ思考プロセスを介護実習で利用者を受け持つことにより実践していく過程がそこには存在しているといえる。

介護は、介護観と技能（スキル）、知識が統合されたものでなければならない。言い換えれば、介護従事者の思いや願いが介護行為として表現されていくものでなければならないと考えている。つまり、この実現のための道具は介護従事者自身であり、熟練された技と人間的な豊かさによって最も安全で効果的な介護が可能になると考えているのである。

人としての夢や希望が託された介護技術で介護従事者の温かい心を伝え、利用者の自立心を引き出し、支える手段となる介護技術を、どのように学生に伝えていくかという使命は重要なことであると認識している。

ユネスコ21世紀教育委員会は、生涯学習の4つの柱として「知ることを学ぶ」「為すことを学ぶ」「(他者と)共に生きることを学ぶ」「人間として生きることを学ぶ」をあげている。

介護実習は、これらすべてを実感として学べるものであろう。且つ、介護の領域に必要な学びもここにあり、介護の質の担保という観点からも、この視点に立った育成は欠かせないのではないだろうか。この介護実習での学びが、利用者との良好な人間関係が確立されながら展開されていくものであり、そのためには豊かな人間性ととも利用者の権利と尊厳を尊重するという価値観が求められていくことに目覚めさせ、介護実習の体験と個別に行う介護過程の展開過程において、いかに指導者が導いていけるかを養成校としては期待したいところである。

介護福祉士にとっては、専門性と倫理は欠かせないものである。学生は、利用者と介護職員との関係を実際に見聞きすることにより、介護のあり

方を模索し介護の実践方法や介護観の確立に繋げていくようである。それらをさらに介護専門職として成長させていくためには、実習現場において指導者や担当する職員による適切な導きが重要であることは間違いない。

今後、ますます介護福祉士の提供するサービスの質の向上と社会的地位の向上が求められていく。介護福祉士養成課程の教育内容の見直しを始め、資格取得方法の改正（現時点では28年度）の背景として、認知症対象者の増加や医療ニーズの高い重度の介護利用者の増加、成年後見や障害者の就労支援など、国民の福祉・介護ニーズはより多様化・高度化していく。これらのニーズに的確に対応できる質の高い人材を安定的に確保していくことが使命であるが、現実には、介護人材不足が深刻な状況にある。それらを少しでも打開していくためには、養成校の使命としても、質の高い介護福祉士を養成していかなければならない。そして学生は、実習施設での有意義な体験をもとに得る自己覚知が必要であり、学生が自らの身体や感性に体験することで訴え、繰り返し自分自身に問いかけて獲得していくことの意味は大きい。学生自身の将来像となる介護福祉士との関係性を築きながら自身の介護観が構築されてこそ、養成校と実習施設・指導者との連携が実を結ぶことになる。

学生は、介護現場で指導という支援を受けながら成長していく。そのためには、指導者自身の資質の向上に加え、実習施設全職員の後継者の育成ともいえる学生の実習に対する認識を強めなければならないといえる。

この実習の受け入れが介護職人材難の一助になると同時に、介護専門職として介護福祉士の位置づけの向上に貢献できる人材に成長していくことを願うばかりである。

IV. まとめ

指導者と教員の相互関係が構築されていることによって実習生は、個々の学生がめざす「実習目標」に到達できる部分は大きい。

教員は、養成校の学習内容を通じて学生を育成し、指導者は介護実習を通じて学生を育成し、将来の介護人材養成に携わっていることを認識した上での連携が必要である。この結果が質の高い介護人材育成やわが国における介護人材確保に繋がり、双方の協力、連携が社会貢献に関与していくことを認識し意図的に行動しなければならない。

冒頭でも述べたが、新カリキュラムにおける介護実

習指定時間は、標準とした2年課程の450時間は変わりはないが、本学の1年課程の場合は210時間となり、旧課程の指定時間よりも150時間短縮されている。それにもかかわらず、実習施設が多岐にわたるようになり、限られた時間でより質の高い実習を養成校独自で作り上げていく必要性がある。

また、このことは、介護体験を通して介護とは何かを理解・再認識し、基礎的な実践能力を習得する場とされていることはいうまでもない。学生を育てること、将来介護福祉士という職種を担っていく人材を育てることを考えれば、教員と指導者及び実習施設職員とともに介護の専門性といった共通理念を構築していくことが求められるといえよう。

そして、学生の成長や実習施設、養成校の質の向上を高めていくためにも、そもそも学生が何のために実習するのかということ突き詰めていくと、最終的には、介護を提供する人材育成を目指すということになる。利用者と関わる人材となるためには、今以上に、利用者に目を向けることと同時に、自分自身を人間的に成長させていくことは必要不可欠であり、また、本学の教育の柱の一つでもある、現任準備期間としての位置づけを明確にしていくためにも、人間性の成長といった部分にも着目した教育体制を養成校と実習施設双方で共有すべきであろう。

筆者らの先行研究^{3)~6)}でも述べたが、介護支援は、多様な個性を持った人々たちを受容できる能力が求められる。しかし、自己確立のできない未熟な学生が年々多くなっているのも事実である。学生の質の低下といわれる所以でもあろう。

しかも、自己中心的な思考が先に出て行動そのものが「群れ」化し、自分自身が見えずに、人からどのように見られているかも振り返らない。かといって、自らが「群れ」に流されていると認識しているわけでもなく、その時々安易に自己防衛に走る傾向にある。

つまり、人間的な成長に個人差が大きくなってきている学生に、本来あるべき実習目的や課題といった点を、いかに意識づけて実習に取り組ませるかといった課題や懸念も年々増加の傾向にある。しかし、学内だ

けでは成長し得ない人間形成も、環境を変え、さまざまな人々たちと関係を持つことにより実習を機に大きく人間成長を遂げる学生もいる。このようなことから、単に介護福祉士としての知識・技術の向上ばかりでなく、人間形成といった点についての指導・助言も含めた実習の意味づけについても指導者・教員間で共有していかなければならない。

今後は、こういった点も踏まえながら養成校としての倫理教育にも着目しながら、修了時にはもちろんのこと、修了後の一介護福祉士としても、介護職・介護職員に対して誇りと責任を持って活躍できる人材を送り出していききたいと筆者らは願っている。

引用文献

- 1) 厚生労働省：介護福祉士養成課程における教育内容等の見直しについて
- 2) 社団法人日本介護福祉士会編：介護実習指導者テキスト，社会福祉法人全国社会福祉協議会，2009
- 3) 荒木隆俊，櫻井嘉宏，松田水月「介護実習の視点1」，羽陽学園短期大学紀要 第8巻第1号，2007
- 4) 松田水月，荒木隆俊「介護実習の視点2」，羽陽学園短期大学紀要 第8巻第1号，2007
- 5) 松田水月，荒木隆俊，櫻井嘉宏，佐藤元姿「介護実習の視点3」，羽陽学園短期大学紀要 第8巻第2号，2008
- 6) 荒木隆俊，伊藤和雄，松田水月「介護福祉士養成に伴う、教育現場と介護現場の役割と連携」，羽陽学園短期大学紀要 第9巻第4号，2011

参考文献

- 1) 社団法人日本介護福祉士会編「介護実習指導者テキスト」，社会福祉法人全国社会福祉協議会，2009
- 2) 松田水月，太田裕子，荒木隆俊「介護福祉士養成課程の学生における、介護実習に関する意識調査－保育士資格を有する学生の特性に着目して－」，羽陽学園短期大学紀要 第9巻第1号，2008

SUMMARY

Takatoshi ARAKI,
Kazuo ITO,
Mizuki MATSUDA,
Yasuko MIYACHI:

Cooperation with the Care Worker Training, the Role of the Nursing Field and Education (2)

— The Focus on Moving Care Practice Leader —

In securing the quality and quantity of professionals in care is demanded, from the standpoint of care worker training school, of course, learn on campus nursing care is a work that will demonstrate through experience about what you have learned I have no idea practice, and should be a practice that fulfilling than ever. To that end, the authors are seeking high expectations to care practice leader.

In light of this situation, focusing on care practice leader prior research the authors also be used, this paper, nursing practice leaders, as well as cooperation with the training school and the role of care practice leader with the care worker training it is intended for what is required for said one opinion.

(T.ARAKI,M.MATSUDA and Y.Miyachi ; Uyo Gakuen College
K.Ito ; Part-Time Lecturer, Uyo Gakuen College)

